

## マレーシアの社会言語学出版物のご案内

綱島(三宅) 郁子

ことばの問題に関心のある方なら、恐らく誰でもご存じであろうドイツの出版社Peter Lang GmbHから、マレーシアの社会言語学系の書籍が3冊出版された。編者はいずれも、筆者がマラヤ大学言語学部博士課程でお世話になっていた指導教官Prof. Dr. Maya Khemlani Davidである<sup>1</sup>。

日本で社会言語学というと、筆者の限られた経験では「ああ、田中克彦ですね」と判で押したように返答された。確かに独特の個性と視点から、日本に新しい業績をもたらした方として、尊敬申し上げます。著作もそれなりにおもしろい。どこか斜に構えたような義憤心の強い若者を惹きつけるような魅力もある。ただ、よく勉強されている先生ならそっと付け加えたものだ。「だけど、ちょっとあの人は考えが偏ってますからねえ」と。

その後10年以上経ち、田中克彦氏のご退官され、時代も移り変わった。しかし私見では、やはり今でも日本の社会言語学には偏り、と言って悪ければ1つの特徴があるように思われる。それは日本国内の言語事情のなせる業でもある。いくら何でも今時、単一民族だとか単一言語の国、という誤解は是正されつつあるとは思いう。だが如何せん、もともと表記法や漢字政策、敬語法および地域方言や社会方言から出発しているので、

その方面は高い専門性を保っている一方、視野がやや狭い印象を与えるのだ。流行テーマも、危機言語、英語帝国主義批判、日本語教育の諸問題、そして在日や沖縄の言語問題など、あるいはアメリカ、カナダ、オーストラリアなどの移民系英語圏内の多言語状況および言語政策を記述するものが目につく。さすがに現在はさらに多様化して、ドイツ語圏やフランス語圏などにも拡大されているものの、問題は「なぜそのテーマを取り上げるのか」という明確な姿勢が見えてこない発表が多いことだ。「単におもしろいと思ったから」「誰もやっていない言語だから」果ては「研究費が下りたから」「国連での話題に便乗して」などと聞いたこともある。

こんな調子の「研究」ばかりではないだろうとは思いたい、日本の場合は、何となく「お気楽」なのだ。今でこそ、各国の言語政策を詳細に調べようという公のプロジェクトも存在するものの、私に関心を持ち始めた1990年当時には、マレーシアに関して、古い文献は別としても、適切な論文やご指導いただけるような先生が、残念ながら国内には見つからなかった。マラヤ大学言語学部に登録した時、まずショックだったのは、方法論や取り組む姿勢の大きな相違であった。もっとも、「植民地時代の遺産を克服しないままの模倣研究」と批判することは簡単である。しかしながら「日本からの発想で‘貢献’しよう’などという意気込みがいかにかに通用しないものか、また甘い考え

<sup>1</sup> JAMS 会報 No.28 に「エッセイ:マヤ先生のこと——シンディ・コミュニティの選択——」と題した拙文で若干紹介した(pp.31-37)。

であったかを嫌ほど思い知らされたことも事実である。とにかく、あれこれ理屈を議論しているよりも、さっさとデータを集めて文章化して提示すること、意見や批判があれば証拠を出して論じること、これを徹底して教えられた。その方が合理的かつ現実的しかも賢明なのである。何しろ、マレーシアは何でも立ち上げの段階だから、自分の守備範囲でせつせと形に出した方が強い。言語問題は必然的に政治、経済、教育、宗教、民族関係、アイデンティティなどと結びつくお国柄である。安楽椅子に腰掛けたような抽象的で高尚なお話は、暇な外国人にでも任せておけばよろしい、というわけだ。

マレーシアで有名な社会言語学者と言えば、Prof. Emeritus Dr. Asmah Haji Omarがあげられよう。その後を嗣いで、今は Prof. Dr. Maya Kemlani David がご活躍中である。お二人の大きな違いは、前者が主流民族であるマレー人である一方、後者が移民二世の北インド系マイノリティであることである。当然、言語政策に対する見方や立場は異なってくる。どちらがよいというよりも、どちらもそれぞれ必死なのだ。共通項としては、勤勉で精力的なタイプで、広範な人脈と女性の特性をうまく生かした仕事をされていることだろうか。また、学生を上手に使って、論文を連名で仕上げるのも得意である。

前置きがすっかり長くなったが、今回ご紹介するのは以下の 3 冊で、いずれもドイツのデュイスブルクにおける言語文化研究会の論集である。

1. Maya Khemlani David (ed.)  
*Methodological and Analytical Issues in Language Maintenance and Language Shift Studies*, 2002.
2. Maya Khemlani David (ed.)  
*Teaching of English in Second and Foreign Language Settings: Focus on Malaysia*, 2004.
3. Maya Khemlani David / Hafriza Burhanudeen / Ain Nadzimah Abdullah (eds.)  
*The Power of Language and the Media*, 2006.

筆者は 1 のみ自分用に所有しているが、難点として、日本に取り寄せ注文をする場合、やや割高で決して安くはない(1 冊 5000 円以上)ことが挙げられる。ただ、これらの著作から、マレーシアの人々がどのような言語生活を営み、自らの多言語社会をどのように捉えているかが具体的にわかることは確かである。言語文化に関心のある方はもちろんのこと、コミュニケーション方面の関係者にも必携であろう。

なお、内容詳細は、別途メーリングリストで出版社からの広告を回覧する(予定な)ので、ご関心のある方はそちらもご覧いただきたい。あるいは言語学関係者のお知り合いにでもご紹介いただければ幸いである。財政的に余裕のある機関にご所属の場合、図書館に 1 冊ずつでも入れていただければ、近い将来、何らかのご参考になるかもしれない。(2006 年 3 月 3 日記)